

バ
ー
か
ら
始
ま
る

水 蒲 白
木 地 沢
香 亜 竜
菜 美 也 人
（ 1 1
8 8 7
） ） ） 物
高 高 高
校 校 校
生 生 生

○蒲地家・亜美の部屋（夜）

勉強机に向かう蒲地亜美（18）、丙応大学の赤本を解く。

机の上に伏せたスマートフォンの通知音が鳴る。

亜美、携帯を確認する。竜也から『俺

の部屋見て』と送られてくる。

亜美、溜息を吐いて窓を開ける。

向かいにある白沢家の2階の窓から白

沢竜也（17）が顔を出している。

亜美「なにー？」

竜也、懐中ライトを亜美に向けて、

竜也「（モールス信号）明日暇？」

亜美「はあ…、なにー！」

竜也、スマートフォン操作する。

亜美のスマホが鳴つて、亜美が確認する。

竜也から『モールス信号だつて。分かるでしょ？』と送られてくる。

亜美、やれやれという感じのスタンプを送つて竜也へ視点を合わせる。

竜也、懐中ライトを亜美に向けて、

竜也「（モールス信号）明日暇？」

と再度ライトを点滅させる。

亜美「暇じゃない。勉強！ 普通に言いなよ！」

竜也「（モールス信号）明日、河川敷のグラウンド来て」

亜美「分かった！ 河川敷のグラウンドね！」

竜也「（モールス信号）そう」

竜也、さつと窓を閉める。

亜美、怪訝そうに窓を勢いよく閉める。

亜美、スマホで、『モールスマンドイ。

普通に言いなよ！』と竜也にメッセージを送つてメッセージアプリを閉じる。直ぐに竜也から、『照れるから』と通知のポップアップが来る。

亜美、既読をつけないようスマートフォンを閉じて、ベッドに投げる。

○ 河川敷・通り道（日替り）

制服姿の亜美と水木香菜（18）が歩きながら。香菜は自転車を引いている。

香菜 「また？」

亜美 「うん」

香菜 「今日は？」

亜美 「モールス信号」

香菜 「また、手の込んだ？、何回目？」

亜美 「12回目」

香菜 「よく覚えてるね」

亜美 「毎月だもん。1年前から」

香菜 「よく茶番に付き合うよね」

亜美 「別に、そんな付き合ってないし」

香菜 「でも、今日も行くんでしょ？ 告白ご

つこに付き合いに」

亜美 「ごつこつて言うなし。しようがないじ
やん。幼なじみだし？ 腐れ縁つてやつ」

香菜 「腐れ縁つて言つてもさ、面倒くさくな
い？ そんなに振つてるなら、好きでもな
いんでしょ？」

亜美 「振つてるつていうか、勝手に振られて
いつてるから」

香菜 「まあ、確かに。亜美、大学決まつて
し、暇つぶしには丁度いいか。天下の丙応
大学だしね」

亜美 「天下つて、東大受ける人がよく言うわ。
模試、A判定なんでしょ」

香菜 「でもまだ受かってないから。亜美みた
いにまだ暇じやないわけ」

亜美 「意地悪だなあ」

香菜 「大学決まるまで、意地悪だよ。私、き
つと。今勉強ばつかでエンタメ欠乏症だし」

亜美 「私にぶつけないでよー。その意地悪」

香菜 「まあ、いいじやん。竜也話くらい教え
てくれてもさ。前の告白は、どんなんだつけ」
亜美 「バク宙成功したら、付き合つてくれ」

香菜 、笑つて、

香菜 「めっちゃおもろいじやん。それで毎回失敗してるんだもんね。竜也エンタメの才能あるよ！」

亜美 「茶化さないでよー！」

香菜 「ごめんごめん。ほら、いるよ」

香菜が河川敷のグラウンドを見る。亜美もつられて見ると、竜也がストレッチしている。

香菜 「はい、いってらっしゃいよ」

亜美 「もう」

香菜、片手で忍者みたいに眼前に人差し指を立て、

香菜 「私は、お邪魔だからドロンするわー！」

香菜、自転車に乗つて駆けてゆく。手

を振つて、

香菜 「じゃあねー！ 明日教えてー」

亜美 「うるさい！」

亜美、香菜から竜也に視線を移し、息を吸う。

○ 河川敷・グラウンド

竜也がストレッチをしている。竜也の横でサッカーボールがある。

亜美が歩いて近づく。

竜也「おう、用事？」

亜美「用事って、自分で呼んだんじやん」

竜也「どっちでもいいじやん。暇でしょ？」

亜美「暇じゃないって、勉強してたんだから」

竜也「勉強って、亜美大学決まつてんじやん」

亜美「決まつても勉強はするの。竜也こそヤバいんじやないの？」

竜也「俺は良いんだよ。俺は。それより、イカしてたでしょ。昨日の」

亜美「なにが？」

竜也「モールスから滲み出る、ノスタルジイつてかエモつてか」

亜美「全然エモくない。そんな時代に生まれ

てないじやん」

竜也「そこを感じ取るのがさ宦び寂びつても

んよー

亜美「はあ、でさ。そのエモいモールスで呼び出して、なに？」

竜也「何つて、そりやあ、まあ。うん」

亜美「まあ？ うん？」

竜也「分かるだろ？」

亜美、そっぽを向いて、

亜美「分かんない！ ちやんと言つてくれない」と分かんないもん」

竜也、ストレッチやめて、立ち上がり、竜也「悪い、悪い。照れ隠しだから。いつも

の」

亜美、竜也のほうを見る。

竜也「俺と付き合つてよ」

竜也、グラウンド端のサッカーゴールの上端を指さして、

竜也「あのポストにボール当てたらさ」

亜美「はあ、出た。できないでしょどうせ」

竜也「なんだよそれ、せつかくエモい感じに言つたのに」

亜美「先月もバク宙で失敗してたじやん。その前は、けん玉だつて。んでその前もフリースローでさ」

竜也「そう言うなつて。ほら今日こそ成功するからさ。そこで黙つて見てなつて」

亜美「まだ、良いなんて言つてないじやん」

竜也「静かに。集中するから」

亜美は黙つて、困惑そうに竜也を見る。

竜也、ボールから助走を取つて止まる。

息遣いが荒い。

竜也「あー、もう」

竜也、落ち着きなくボールを蹴る。ボールはボテボテとボールに入る。

竜也「あー、くつそー」

亜美「だから言つたじやん！」

竜也は膝をついてうなだれる。

亜美、ボールからボールを拾つてくる。

亜美、竜也の近くにボールを転がし、

亜美「せめて上に外しなよ。覚悟なさすぎ」

竜也「うるさいな」

亜美「そういう所が嫌いだつて言つてんの！」

調子に乗つてさ。結局、ビビつてさ」

竜也「いや、ごめん」

亜美、ボールから助走を取つて、

亜美「大体」

亜美、ボールを蹴る。ボールはバーで跳ね返る。

竜也、溜息を吐き、立ち上がって、

竜也「サッカーで大学行くだけあるわ」

亜美「竜也と違つてビビつてないだけ」

竜也「痛いこと言うなよ」

亜美「言われたくなければ、小細工なしで告白して来なよ」

竜也「：分かつた。また、今度はそうする」

亜美「大学何処受けるか決まつた？」

竜也「丙応大学。亜美と同じとこ」

亜美「じゃあ、丙応受かつたら付き合つてあ

げる」

竜也「え？」

亜美 「丙応受かつたら付き合つてあげるって
言つてんの！」

竜也 「マジか。やつた」

亜美、グランドを後にしながら、振り

返つて

亜美 「今度こそ、成功させてよ」

竜也 「分かつてる！ 受かつてやるから」

亜美、ふふふと笑う。

了